

第3章 基本研修や出前サポートによる支援

探究型学習を推進するために、その基礎となる考え方を理解することが教員一人一人に必要である。平成28年度、県教育センターでは、小学校・中学校教職5年経験者研修（以下、5年研と表記）や小学校・中学校教職10年経験者研修等の基本研修において探究型学習の基礎となる考え方の説明や授業づくりの演習を実施したり、出前サポートによる校内研修の支援を行ったりした。本章では、各学校における校内研修会の企画立案のためのたたき台として、次の二つを例として示す。一つは5年研における講座の概要、もう一つは出前サポートによる校内研修会のワークショップの概要である。それぞれについて、受講者の感想や評価も記載しているため、出前サポートを依頼する際の参考とする他に、各学校での校内研修会の企画をする際に活用いただきたい。

1 平成28年度山形県小学校・中学校教職5年経験者研修における講座

本県では、教職経験5年の公立学校教員を対象に、悉皆研修として5年研を実施している。5年研の目的は、教員として必要な使命感と教育観の深化を図ることと、専門的な知識と技能を高め、教員としての資質と実践的指導力の向上を図ることである。

5年研では校外研修を2日間行っている。そのうちの1日が「県教育センターにおける研修」であり、平成28年6月23日（木）に小学校教員59名（特別支援学校 幼稚部・小学部の教員含む）、6月24日（金）に中学校教員55名（特別支援学校 中学部・高等部の教員含む）が参加した。実施要項における「県教育センターにおける研修」の日程と内容は、次のとおりである。

時 間	研 修 内 容	方法
10:00～10:20	開講式・オリエンテーション	
10:25～11:05	教育公務員の服務	講義
11:20～12:00	探究型学習の推進に向けてⅠ～探究的な学びとは～	講義
13:00～14:30	探究型学習の推進に向けてⅡ～探究型の授業づくり～	講義・演習
14:45～16:05	いじめ未然防止のための学級経営	講義・演習
16:05～16:30	閉講式・諸連絡	

探究型学習に関わる研修として「探究型学習の推進に向けてⅠ」と「探究型学習の推進に向けてⅡ」の二つを開講した。5年研において、探究型学習に関わる研修を設定することにより、受講した教員自らが探究型学習を実践することができるようになることに加え、初任者や2年目の教員とともに、探究型学習の校内研修を行うことができる。また、教職10年経験者研修においても、5年研と同様の内容の研修「探究型学習の推進に向けて」を行った。

これらの研修により、教職員全員の参加による探究型学習の授業づくりに関する校内体制をつくることが可能となり、OJTが促されることも期待される。

(1) 「探究型学習の推進に向けてⅠ」の概要

探究型学習の基礎となる考え方と児童生徒が探究している姿とその見取りについて説明を行った。資料として、『平成28年度 学校教育指導の重点』の「＜コラム＞探究型学習を推進していくために」（山形県教育委員会 2016）を配付した。次の枠内は、配付した資料である。

<コラム> 探究型学習を推進していくために

探究型学習について

探究型学習とは、「児童生徒が自ら課題を見付け、自ら考え、主体的に解決していく学習」です。これからの社会を生き抜くために必要な力は、強い関心や意志を原動力に、知恵を駆使しながら、目の前の困難を乗り越える力であると考えます。この力を育成するには「探究型学習」が必要であり、幼児期における仲間との「あそび」に始まり、その延長線上に、小中高等学校における主体的・協働的な学びを創っていくことが大切です。

1 探究型学習の定義

探究型学習とは、「課題の設定」「情報収集（文献・教材・資料の調査・フィールドワーク、実験、観察等の活動）」「整理・分析」「まとめ・表現」という一連の探究活動のプロセスに児童生徒が主体的に参加することを通して、知識・技能と学び方をバランスよく習得させながら、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育んでいくことのできる多様な学習方法・形態の総称です。

- 次期学習指導要領改訂に向けて諮問されている学習方法としてのアクティブ・ラーニングは、本県が進める探究型学習と同義ととらえます。

2 探究型学習のねらい

(1) 児童生徒の学力を高める

総合的な学習の時間や各教科・科目において、主体的・協働的な学びによる課題解決型学習を通し、「基礎的な知識・技能」やそれらを活用して課題を解決していく「思考力・判断力・表現力等」、そして、「主体的に学習に取り組む態度」等の学力をバランスよく育成することをねらいとします。

特に本県においては、「思考力、判断力、表現力等」をはぐくむという点と、「主体的に学習に取り組む態度」を養うという点において課題が見られ、そうした「学力」をしっかり育てることが必要です。

(2) 教員の指導力を高める

- ① 教員が、日常的に教材になりそうな資料を収集したり、地域教材の開発のために地域でフィールドワークしたりするなど、課題探究的な活動を自ら体験又は構想し、主体的・協働的な学びが進められる単元や授業をデザインすることができる実践的指導力を身につけることをねらいとします。
- ② 教育山形「さんさん」プランによる少人数学級の利点を最大限に活かし、担任力を基盤として、個々の能力を最大限に伸ばす指導力を身につけることをねらいとします。

3 探究型学習を進める上で重視すること

(1) 単元や授業の構想

【特に重視すること】

- ◎ これまで以上に、教師は児童生徒一人一人の学びを見つめ寄り添うことが大切です。その際、教師の児童生徒を見つめる目（児童生徒観）をそろえるようにします。
- ◎ 教える側の思考から学ぶ側の思考で授業を構想していくことが大切です。その際、教師が探究活動のプロセスを固定的にとらえることがないようにします。

① 児童生徒一人一人の学びを見つめ寄り添うこと

どの教師も「可能性のある児童生徒」という肯定的な目で一人一人の児童生徒を見つめることが大切です。その際、児童生徒の興味・関心と教師の願いとしての学習内容のバランスと調和を考えて授業を構想するようにします。児童生徒を見つめることについては、「4つの目をもつ保育者」（幼保小連携スタートプログラム 山形県教育委員会 平成22年）の考え方が参考になります。

② 教える側の
思考から学ぶ
側の思考で授
業を構想して
いくこと

先述した一連の探究活動のプロセスは、児童生徒の学びの姿であり、およその流れのイメージです。教師が児童生徒の学びを無理にこのプロセスに当てはめるではありません。よって、いつも順序よくこの流れが繰り返されるわけではなく、順序が前後することもあるし、一つの活動の中に複数のプロセスが一体化して同時に行われる場合もあります。

児童生徒の自然な思考を思い描きながら、児童生徒が主体となる授業を構想していく必要があります。

(2) 授業の実際

【特に重視すること】

- ◎ 「基礎的な知識及び技能を習得する」について考える際には、児童生徒が、授業の最後に達成感をもてるようにすることが大切です。
- ◎ 「思考力、判断力、表現力等を育む」について考える際には、児童生徒が、「何をどのように考えればよいか」を具体的にイメージできるようにすることが大切です。
- ◎ 「主体的に学習に取り組む態度を養う」について考える際には、児童生徒が、各教科・科目等を学ぶ楽しさやよさを実感できるようにすることが大切です。

① 児童生徒が、
授業の最後に
達成感をもて
ること

児童生徒が問題解決をしていく際に、「どうしてだろう?」「こうすればいいのかな?」「なるほど納得!」等、実感を伴うことが必要です。特に、授業の終末においては、教師が一方的に指導事項をまとめ、それを児童生徒がノートにそのまま写すのではなく、自分なりの言葉や表現でまとめられるようにしていくことが大切です。

授業で獲得した知識や技能をそのままにせず、他の学習や生活場面等で既存の知識・技能と結び付けたり、組み合わせたりすることで知識・技能の確かな定着につながります。

② 教える側の
思考から学ぶ
側の思考で授
業を構想して
いくこと

児童生徒がより深い思考をする際に、思考をするための知識やスキル等を意識して、ものの見方や考え方を具体的にしていくことが重要です。本県では、「思考スキル」として紹介しています。無目的に思考スキルを使うのではなく、目的に応じて児童生徒が思考スキルを使わざるを得ない状況になっていることが必要です。また、例えば「比較する」という思考スキルにおいては、AとBをただ比較するだけではなく、比較をしてAとBの共通点や相違点に気付き、そこから自分の考えを広げたり深めたりしていくことが大切です。

学習問題や教師の発問等に思考スキルを取り入れ、考えが深まる問題にします。そして、協働的な学びを通して児童生徒一人一人の違った考えに気付きながら問題を解決していくことが深い思考へとつながります。

③ 児童生徒が、
各教科・科目
等を学ぶ楽し
さやよさを実
感できること

児童生徒が問題解決の場面で「おもしろそう。やってみたい。」「たいへんだけどやってみたい。」等と思えることが必要です。それには、直面している問題を自分事としてとらえられるようにします。そのために、児童生徒の興味や関心を把握し、学習の対象との出会わせ方を工夫したり、深い思考を必要とする課題を設定したりする等の意図的な指導が大切です。

児童生徒の自然な思考を思い描いて授業を構想することが、児童生徒の主体的な学びにつながります。

(『平成 28 年度 学校教育指導の重点』山形県教育委員会 2016 pp.14-15)

「探究型学習の推進に向けてⅠ」において、5年経験者に伝えたかったことは「学ぶよさを感じ、主体的に学びに向かう児童生徒を育てるために、教師はどのような姿勢で授業に臨むかを自分のこととして考え実践すること」である。詳しくは、研究報告書(1年次)を参照されたい(研究報告書(1年次)は、県教育センターのWebページ URL <http://www.yamagata-c.ed.jp> よりダウンロードできる)。端的に言えば、教

師の姿勢とは、児童生徒一人一人の学びの姿をよく見て、児童生徒の思考を洞察し、学ぶ側の思考に寄り添った授業を構想、実践することであり、そのためには、真摯な児童生徒理解と深い教材理解が欠かせないということである。説明には、研究報告書（1年次）第1章に基づき作成したスライドを用いた。スライド中で紹介した事例は、小学校の5年研では算数科 第5学年「三角形の面積」、中学校の5年研では理科 第1学年 第1分野「光の性質」であった。次は、中学校で用いたスライドである。

探究型学習の推進に向けて I



山形県教育センター

1

説明の前に

質問
探究型学習で育てたい生徒の姿はどのようなものでしょうか？

今のお考えを、まわりの方と相談せずに、配付したワークシートの「説明の前に」の欄へ記入してください。
メモ程度でかまいません。

2

なぜ「探究型学習」か

これからの社会を生き抜くために必要な力

強い関心や意志を原動力に、知恵を駆使しながら、目の前の困難を乗り越える力

↑

「探究型学習」が必要

3

四人の幼児の学びを支えているもの



子供の主体的な問い

- 水を流してダムをつくりたい
- おもしろそう
- ほくもやってみだい

協働的な学びによって、よりよくなる期待

- 力を合わせれば、すごいものができそう
- 一人でできないけれどもみんなとならできそうだな
- 友達と遊ぶと楽しい
- アイディアを出し合い、少しずつよくなっていくね

4

「探究型学習」の定義

「課題の設定」「情報収集（文献・教材・資料の調査・フィールドワーク、実験・観察等の活動）」「整理・分析」「まとめ・表現」という一連の探究活動のプロセスに主体的に参加することを通して、知識・技能と学び方をバランスよく習得させながら、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等をはぐくんでいくことのできる多様な学習方法・形態の総称

いわゆるアクティブ・ラーニングは、本県が進める探究型学習と同義ととらえる

5

（参考）アクティブ・ラーニングとは

- ・課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習
初等中等教育における教育課程の改善等の在り方について（閣議）平成26年11月20日
- ・教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、**学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称**
新に必要とするための大学教員の質的転換に向けて～生涯学習の継続、主体的に考える力を育成する大学へ～（国研）

6

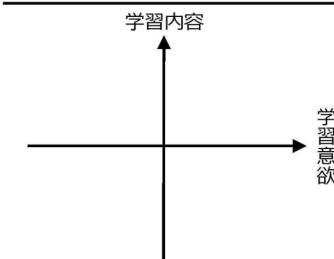
（参考）アクティブ・ラーニングの視点

中央教育審議会 教育課程部会 教育課程企画特別部会「論点整理」平成27年8月26日

- 習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた**深い学び**の過程が実現できているかどうか。
- 他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、**対話的な学び**の過程が実現できているかどうか。
- 子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、**主体的な学び**の過程が実現できているかどうか。

○ 子供たちがこうした学びを経験しながら、**自信を育み必要な資質・能力を身に付けていくことができるようにする。**

7



8

(参考) アクティブ・ラーニングの視点
中央教育審議会 教育課程部会 教育課程企画特別部会「論点整理」平成27年8月26日

i) 習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できていること

ii) 他者との協働的な学びを通して、自己学習の能力が向上していること

iii) 主体的な学びを通して、自己学習の能力が向上していること

**探究型学習が
目指すものと
軌を一にしている**

○ 子供たちが、自ら学び、自ら考え、自ら表現しながら、自信を育み必要な資力・能力を身に付けていくことができるようにする。

「探究型学習」の定義

「課題の設定」「情報収集（文献・教材・資料の調査・フィールドワーク、実験、観察等の活動）」「整理・分析」「まとめ・表現」という一連の探究活動のプロセスに主体的に参加することを通して、知識・技能と学び方をバランスよく習得させながら、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等をはぐくんでいくことのできる多様な学習方法・形態の総称

いわゆるアクティブ・ラーニングは、本県が進める探究型学習と同義ととらえる

「探究型学習」の定義

「課題の設定」「情報収集（文献・教材・資料の調査・フィールドワーク、実験、観察等の活動）」「整理・分析」「まとめ・表現」という一連の探究活動のプロセスに主体的に参加することを通して、知識・技能と学び方をバランスよく習得させながら、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等をはぐくんでいくことのできる多様な学習方法・形態の総称

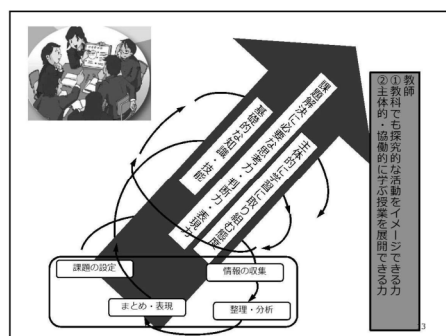
注意！
 一連のプロセスをなぞるだけで、探究型学習になるわけではない

いわゆるアクティブ・ラーニングは、本県が進める探究型学習と同義ととらえる

「探究型学習推進」のねらい

① 児童生徒の「確かな学力」を高める
 □主体的・協働的な学びによる課題解決型学習を通じ、「基礎的な知識・技能」やそれらを活用して課題を解決していける「思考力・判断力・表現力等」、そして、「主体的に学習に取り組む態度」等の学力をバランスよく育成すること

② 教員の指導力を高めること
 □主体的・協働的な学びが進められる単元や授業をデザインすることができる実践的指導力
 □教育山形「さんさん」プランによる少人数学級の利点を最大限に活かし、担任力を基盤として、個々の能力を最大限に伸ばす指導力



探究型学習を進める上で重視すること

(1) 単元や授業の構想
 ① 一人一人の学びを見つめ寄り添うこと
 ② 教える側の思考から学ぶ側の思考で授業を構想していくこと

(参考) 4つの目をもつ保育者

1 「透視の目」
 子どもの内面を見つめる

2 「感性の目」
 子どものよさを引き出す

3 「プロセスの目」
 子どもを多角的・継続的に見続ける

4 「内省の目」
 「これでいいの？」と振り返る

「幼保小連携スタートプログラム」山形県教育委員会 平成22年 より

探究型学習を進める上で重視すること

(1) 単元や授業の構想
 ① 一人一人の学びを見つめ寄り添うこと
 ② 教える側の思考から学ぶ側の思考で授業を構想していくこと

探究型学習を進める上で重視すること

- (1) 単元や授業の構想
 - ① 一人一人の学びを見つめ寄り添うこと
 - ② 教える側の思考から学ぶ側の思考で授業を構想していくこと
- (2) 授業の実践
 - ① 児童生徒が授業の最後に達成感をもてること
 - ② 教える側の思考から学ぶ側の思考で授業を構想していくこと
 - ③ 児童生徒が、各教科・科目等を学ぶ楽しさやよさを実感できること

17

探究型学習 推進協力校 において 昨年度、実践された先生方の話から

- ・ 日々の授業の質を高めていきたい
- ・ 取り組みやすい単元や学習内容から探究型学習をはじめてみよう
- ・ 新しい時間を探究型学習として設け、新たに取り組んでみよう
- ・ 総合的な学習の時間は探究型学習だから、総合的な学習の時間を大切にしよう

18

探究型学習 推進協力校 において 昨年度、実践された先生方の話から

- ・ 日々の授業の質を高めていきたい
- ・ 取り組みやすい単元や学習内容から探究型学習をはじめてみよう
- ・ 新しい時間を探究型学習として設け、新たに取り組んでみよう
- ・ 総合的な学習の時間は探究型学習だから、総合的な学習の時間を大切にしよう

どのアプローチからでも
探究型学習が目指すものに迫れます

19

探究型学習 推進協力校 において 昨年度、実践された先生方の話から

- ・ 日々の授業の質を高めていきたい
- ・ 取り組みやすい単元や学習内容から探究型学習をはじめてみよう
- ・ 新しい時間を探究型学習として設け、新たに取り組んでみよう
- ・ 総合的な学習の時間は探究型学習だから、総合的な学習の時間を大切にしよう

20

授業における具体的な生徒の姿から

中学校 理科 第1学年

「光の性質」
身の回りの物理現象

21

授業における具体的な生徒の姿から

単元計画

- ・ 8時間配当の第1教時
- ・ 第1教時・第2教時をひとまとまりと考えた。2時間かけて、本単元における課題を設定した。
- ・ 第3教時以降、光の反射、全反射、屈折、凸レンズの働きを学習する。

22

授業における具体的な生徒の姿から

授業設計における、本時と次時を通して行う課題設定の方向性

- ・ ピンホールカメラをつくり、スクリーンに写る像が、上下左右が逆さまになっているのが不思議だ。
- ・ 身の回りにあるカメラはどのような仕組みで画像を撮っているのかを知りたい。
- ・ カメラの中のレンズや鏡の働きを理解すれば、わかるのではないかな。

23

授業における具体的な生徒の姿から



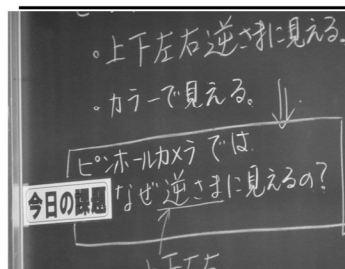
24

授業における具体的な生徒の姿から



25

授業における具体的な生徒の姿から



26

授業における具体的な生徒の姿から



27

授業における具体的な生徒の姿から



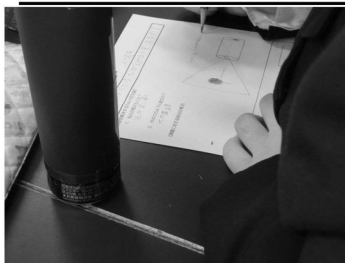
28

授業における具体的な生徒の姿から



29

授業における具体的な生徒の姿から



30

授業における具体的な生徒の姿から



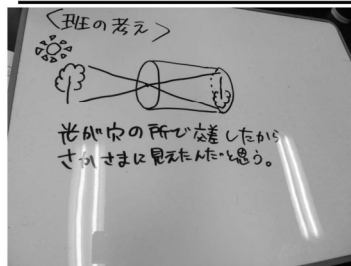
31

授業における具体的な生徒の姿から



32

授業における具体的な生徒の姿から



本時において見られた生徒の学びの姿

- ・課題を自分のものとして捉えている
- ・これまでの生活経験との関連付け
- ・今日新たに得た知識とのずれ・認知的葛藤

主体的な学び

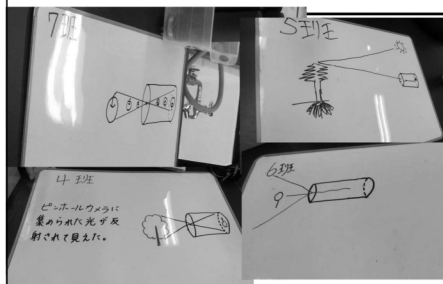
- ・班の仲間との対話

対話的な学び

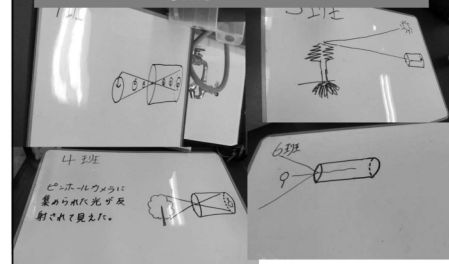
- ・実際に自分のピンホールカメラで見えたことを説明するために、理科的な知識や考え方をを用いて、組み立てながら思考

深い学び

他の班の考えはこのようなものでした



先生ならば、次の時間は、どのような授業を展開しますか？



先生ならば、次の時間は、どのような授業を展開しますか？

「探究の分岐点」
生徒の学びの姿を
フィードバックし、
授業設計(教師の出方)
をすることができるか

探究型学習を進める上で重視すること

- (1) 単元や授業の構想
 - ① 一人一人の学びを見つめ寄り添うこと
 - ② 教える側の思考から学ぶ側の思考で授業を構想していくこと
- (2) 授業の実際
 - ① 生徒が授業の最後に達成感をもてること
 - ② 教える側の思考から学ぶ側の思考で授業を構想していくこと
 - ③ 生徒が、各教科・科目等を学ぶ楽しさやよさを実感できること

探究型学習の授業において

学習活動を通して、
生徒自身が「何ができる」
ようになったのかを自覚。
さらに、生徒自身が
「私たちなら何ができそうか」
を考えられるようになる。

↑
教師は、それを引き出す役割

各学校で育てたい
生徒の姿を目指して

説明のおわりに

質問
探究型学習で育てたい生徒の姿
はどのようなものでしょうか？

今のお考えを、まわりの方と相談せずに、
配付したワークシートの「説明のおわり
に」の欄へ記入してください。
メモ程度でかまいません。

説明において意識したことは、次の五つである。

- 探究する主体は、児童生徒であること。
- 「課題の設定」「情報収集」「整理・分析」「まとめ・表現」という一連の探究活動のプロセスをなぞるだけでは、児童生徒主体の探究は生まれないこと。

- 探究する児童生徒の姿を具体的にイメージできるようにすること。
- 児童生徒の思考を丁寧に見て取ること。
- 児童生徒の学びを見て取った次に、どのような授業を構想し展開するかが探究の分岐点であること。

これを意識して説明することで、探究型学習の「やり方」を伝えるのではなく、その根底に流れている「探究型学習によってどのような児童生徒を育てたいのか」という思いをわかってもらうことができると考えた。

5年経験者は、説明の前後それぞれで「探究型学習で育てたい児童生徒の姿」について各自まとめた。以下は、5年経験者の記述したものの一部である。

【小学校】（原文のまま）

説明の前	説明の後
自ら問いを考える姿 「ああでもない。こうでもない。」と一生懸命思考し合う姿 主体的に学ぶ姿	課題を自分のものとしてとらえる姿 既習の内容から「どうすれば解けるのか？」と自分なりの考えをつくろうとする姿 友だちの考えをきいて何がよいかをつきつめていく姿
自ら学んで、自ら解決していける姿	同じゴールを目指す上で、様々なルートをたどる子供たちの姿、自分たちでそのルートをさがしだす姿
児童が自ら課題を見つけ、積極的に他者と関わりながら学びの大切さや達成感を感じていける姿	児童が自ら学ぼうとする意欲を持ち、積極的に他者と関わりながら、精一杯解決に向けて主体的な学びをし、共に高め合いながら、喜びを感じていける姿
学んだことの中から自分で疑問を持ち、その解決に向けて調べたり実験したりすることができる子供	自分でその課題に向けて、様々なアプローチをしていく 多様な考えをもつ 友達の考えを聞き、自分のものとして考える
子供たちが学習や身のまわりのことから自分なりの課題や疑問を見つけて考えたり調べたりして解決していこうとする姿	子供たちのよさをしっかり把握し、子供たちが友だちと一緒に主体的に学んでいく中で深い学びになっていく姿
疑問や願い（こうしたい）を見つけ、達成のために活動する姿	疑問や願い（こうしたい）を見つけ、達成のために活動する姿に加えて、知りたいことにうちこむ姿、やりたくてとまらない姿
自主的に、主体的に生き生きと目的意識を持って活動できる児童	自分ができること、やってみたいことを一人一人が考え、挑戦することができる児童 主体的に生き生きと学ぶ児童
自分が知りたいと思ったものを、夢中で楽しんで、調べたり考えたりする姿	自分の考えを持ち、友達の考えから学んだことを、もう一度自分の中で整理して、「すとな」と落ちるような姿。さらに、そこから今度は何ができるのか次の課題を見つけられればよい。
自分の中で起こった課題に対し、自分なりの力で解決してみる、しようとする姿	子供が、学習した後に、楽しさと共に、充実感やできた！できるようになった！という喜びを持っている姿

【中学校】（原文のまま）

説明前	説明後
生徒一人一人が自ら課題を設定し、それを仲間と協力しながら解決していく姿	自ら学び自ら考え、解決できたならばそれを使った新たな問いを自ら見つけていく姿
自分で疑問を見つけることができる姿 見つけた疑問について答えを予想できる姿 何をすると、疑問が解けるか見通せる姿	自分が楽しんで疑問を見つけ、それを解決するために知識や技能を活用して、自分の力で答えを見つける（作る）学習
「わからない」→「なんで？」を大切に して、それをそのままにしない生徒	「わからない」→「なんで？」を大切に して、それをそのままにしない生徒 友人の考えから吸収、以前の学びから発展、 他につなげる。
必要感を持って、主体的に学ぼうとする姿 自分の適性	主体的に学び続けようとする姿（その時 だけで終わらずにその先に自然とつながる）
主体的に課題を見つけて、それを解決して、 生きるための知恵を広げられる生徒の姿	生徒が主体的に課題を見つけて、その課題 を意欲的に調べて解決し、生きるための知恵 を広げられる生徒の姿
自ら考え自ら判断し表現できる生徒	主体的に学び続けるための方法と自信を 持った生徒
課題や疑問などを解決するために、友だち と協力しながら情報を集め、分析して解決し ていこうとする児童生徒	課題や疑問などを解決するために、友だち と協力しながら情報を集め、分析して解決し ていこうとする児童生徒にプラスして、学び 続けたい（何があっても）と思ってくれるよ うな児童生徒
課題に向き合い、自分で解決しようとし、 周囲と力を合わせて解決できる姿	学んだことで完了するのではなく、学んだ ことで、次の学びや可能性が広がり、それを 生きる力として実感できる姿
自分の考えを持ち、周りの生徒との話しあ いや交流を通して、自分の考えを深めたり、 広げたりすることができる	自分で課題を立て、課題を解決するために 計画し、活動し、周りの人と交流することで、 自分の考えを深めていく生徒 答えではなく、「考え方」を自分でわかり、 いろんなことに応用できる生徒
進んで課題を発見する。周囲と協力して学 ぶ。主体的に学習に向かう。資料の活用	既存の知識と新しい知識をうまく融合させ る。「自分には何ができるか」「これから何 をしたいか」を考えながら学ぶ。生きていく ために必要な「学力」をつける。
一つの題材に対して自分たちで考えていく 姿。疑問→調べる方法→実験で確かめる	理想→自分たちで課題を見つけて「どうす るとわかるか」を考えられる。 そこまで行かなくてもこちらから考えた課 題に対して「どうやったらわかるか」とか「ど うなっているのか」を考える。

説明前	説明後
生徒自身が課題を見つけ、それを自ら考え、場合によって他者と交流し、主体的に解決する姿。	生徒に身近な課題、「やってみたい!」「できそうだな」と思わせる魅力のある課題を設定し、「これをやってみよう」と見つけれられる姿。それを解決するために、思考し、判断し、表現していくことができる姿

ほとんどの教員が、説明の後では「探究型学習で育てたい児童生徒の姿」をより具体的に持ち、6教振で目指している「学び続ける人」のイメージに近づけることができていた。説明の前後ともに「今後生きていく上でぶつかる課題に対し、学んだことを活かして何らかの対応ができる（または、対応するために取り組もうとする）姿」や「つながりながら主体的に学ぶ生徒」のように変化がなかった受講者もいた。

次は、5年経験者の感想や疑問・質問である。

【感想】（原文のまま） ※（小）小学校教員の記述 （中）中学校教員の記述

- ・ いっものの授業に少し工夫を加えて、実践してみたい。（小）
- ・ 子供たちの学び方の様子はバラバラでも、能動的に学ぶことで探究しているということを改めて気付かされた。自分のやりたい授業にとらわれ、子供の学び方を型にはめるのではなく、子供の多様性を生かせる力をつけたい。（小）
- ・ 子供たちがじっくり考える・深く学ぶ・自ら学ぶ……etc. こんな姿をつくるための授業をコーディネートするのが我々の仕事なのかなと感じました。（小）
- ・ 探究の分岐点、なるほどと思いました。（小）
- ・ 各学年・各教科単元の（その中の1時間でもよいので）指導案集も今後つくっていただけるとよい。まだまだイメージ≠実践だが。（小）
- ・ 評価の仕方など難しく感じている。評価と一緒に単元計画を組むことができれば…と思う。（小）
- ・ 学校研究が「学び合い」であるが、「学び合いありき」になり「学び合いによる弊害」が生じていると指摘されたことがある。どう活かすかが難しい。（小）
- ・ 学習の流れがイメージできた。学習過程の中でどのように授業を展開していくかで探究型になるのかならないのかがわかれると思う。その発想ができるように、生徒目線を持たなくてはいけないと思う。（中）
- ・ 生徒の実態の確認 → 次の我々の一手 を大切にしたい（中）
- ・ 具体的なイメージはまだもてませんが、探究させるところとそうでないところの見極め、教師の出方など、探究の分岐点を考えていきたいと思います。（中）
- ・ 日頃より探究を意識しているがなかなか難しい。新たな問いが生まれる授業をしていかなければならない。（中）
- ・ 解決できる力、それを更新して活かしていける力を育てる（中）
- ・ 解決できるかどうかより、解決しようとするそのものが大事だと感じました。（中）
- ・ 「知識を知って」→「わかって」→「使える」子の育成をしなければならないんだと思いました。（中）
- ・ 知識を教えることはできても、わかって → つかえる までもっていくためのプロセスはかなり難しいと思いました。（中）
- ・ どうしても話し合いをさせなければ…と考えてしまうが、見た目だけでなく頭の中がアクティブであればよいのだと思った。（中）
- ・ 見た目で見えない「脳に汗をかく」状態をどうやって見とればいいのか…（中）

- ・ 様々な方法がある…がゆえに、難しさを感じる。(中)
- ・ 教科の本質を理解していないと子供の学びたいを引き出すことができないと感じた。(中)
- ・ 生徒が学習内容のおもしろさに気付き、さらに知りたい、深く知りたいと意欲的になっていく姿にプラスして、達成感を持てる授業を心がけていきたい。(中)
- ・ 教師は生徒の考え・興味などを引き出す黒子になることが大切だと感じた。(中)
- ・ 教えるだけでなく、引き出すことが大切だと思った。(中)
- ・ 授業を○時間で終わらせないと…ということが多々あり、それを考えた時、生徒のわからないことや面白い意見に迫れない…と思ったのが正直な感想です。もっと教員側でペース配分を考えるべきなんだな…と思いました。(中)
- ・ 「引き出す」という言葉に難しさを感じた。今までやってきていないことをやろうとするには勇気がある。教科書が終わるのか等も含め不安だが、考え方を変えなければならない。(中)
- ・ 「学びを深める」ために「主体的な学び」が必要であり、「対話的な学び」が必要である。その手立てを教師側が準備しなければならない。(中)
- ・ まずは自分自身がアクティブ・ラーニングできていないとダメ(中)
- ・ どんな生徒にも応えられる知識と技能が必要だと思った。(中)
- ・ 評価する教師の見方や考え方が難しいと感じた。(中)

【疑問・質問】 (原文のまま) ※ (小) 小学校教員の記述 (中) 中学校教員の記述

- ・ 協働的に学ぶための場の設定 (ペア・全体・シャッフル) に日々苦戦しています。(小)
- ・ 探究型学習の授業の事例をもっと知りたい。(小)
- ・ 活用型の授業案作成の工夫の仕方 (小)
- ・ 主体的に考えようとする気持ち、意欲を持たせていきたいが、なかなか全員に持たせることができない。(小)
- ・ 指導案と別の姿が子供たちに見られた時のよりよい指導の工夫 (小)
- ・ 探究可能な課題をどうつくるか? (小)
- ・ 生徒の「はてな(疑問)」のつくり方。(中)
- ・ 生徒の意見を自由に交流し、その後が毎時間悩む。オープンにすると、一つに絞るとき、その時々で発問に違ってきますが色々と毎日考えている。(中)
- ・ 知識が不十分な生徒にどう探究型学習を活用させるのか。(中)

探究型学習を実践していくことで、児童生徒の主体的に学ぼうとする姿勢や人間性が育成・伸長し、「学び続ける人」を育てていくことにつながることを共通認識とすることができた。短時間であっても、探究型学習について基礎となる考え方を共有することは、授業づくりにおける共通の基盤となり、教員一人一人が探究型学習を推進するために有効であると感じた。このことから、定義や基礎となる考え方、国の動向との関わり、児童生徒の学びの姿などの説明により、教員の意識の土台と方向性をある程度一致させると同時に、なぜ今、山形県内の全公立小・中・高等学校で探究型学習を推進するかを伝えることができるため、基本研修は絶好の機会であると考えられる。

一方で、主体性や協調性、思考力・判断力・表現力を伸ばすために、どのような資質・能力を発揮させるのかということについては、40 分間という短い時間では説明に含めることができなかった。また、5 年経験者の記述にも、「学び続ける人」を育てていくために発揮させたい資質・能力についての具体的な記述はあまり見られず、資

質・能力ベースの授業づくりについて不安を感じているような記述がいくつか見られた。授業をつくることができるようになった教員だからこそ、これまで実践してきた授業のどこを生かしながら、どの部分をどのように改善していけばいいのかというところに、不安を感じているのだろう。

探究型学習の授業をどのように構想・展開していくかについて、実際考えたとき、探究型学習についての説明を受けることと児童生徒の学びの姿の具体例を見たりすることだけでは不十分であると言える。

(2) 「探究型学習の推進に向けてⅡ」の概要（小学校を中心に）

「探究型学習の推進に向けてⅡ」では、探究型学習の授業づくりの実際について理解を深めた。小学校の5年研では、事例として小学校算数 第4学年 「面積」の学習指導案を用いて、ワークショップ形式で研修を行った。中学校の5年研では、教科ごとに講義・演習等を通じて理解を深めた。以下に、小学校の5年研におけるワークショップの流れを示す。なお、このワークショップは、『単元を構成する力を付け、授業力を高める授業研究ハンドブック』（山形県教育センター 2010）に基づいたものである。

○ ワークショップのねらい

算数の学習指導案を題材として、様々な立場から気付いたことや考えたこと等を出し合い、探究型学習の授業づくりについて考える。

○ ワークショップの流れ

STEP 1 ワークショップの流れの確認。

STEP 2 学習指導案を探究的な学びにしていくためのポイントや具体的な手立て（アイデア）を、付箋紙へ記入。

STEP 3 ① 拡大した学習指導案に付箋紙を貼り、グルーピング。

② グルーピングされたものにタイトルをつけ、関連しているグループを線でつなぐなどして整理（構造化）。

③ 模造紙に新たな学習指導案を作成したり、ポイントを整理したりしてもよいことを指示。

STEP 4 他のグループとのアイデアの共有化。

STEP 5 ワークショップの振り返り。

また、ワークショップにおいて、小学校第4学年の学級を想定して作成した学習指導案を、県教育センター指導主事が例として提示した。その学習指導案を、次の枠内に示す。

なお、中学校においては、担当指導主事が、各教科の専門性や特性を考慮し、企画・運営を行った。

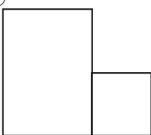
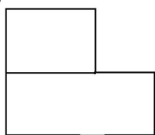
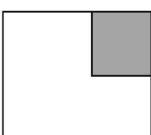
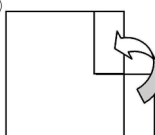
第4学年 算数科 学習指導案

1 単元名「面積」

2 本時の指導（5／11時間）

（1）目標 長方形を組み合わせた複合図形の面積を既習の公式を使って考えることができる。

（2）学習過程

学習活動（○主な発問 △指示 ・児童の反応）	※指導上の留意点 ・教師の支援 ◎評価
1 本時の課題をつかむ。  このような図形の面積の求め方を考えよう。 2 複合図形の求積方法について考え、話し合う。 ○どのようにしたら求められるか考えましょう。 （1）自力解決する。 - 図形を2つの長方形に分けるとできそうだ。 ①  ②  ③  ④  （2）互いの考えを発表し、比較検討する。 △ペアで求め方を説明し合ひましょう。 △全体で確認してみよう。 2つの長方形分けると求められる。 - 大きな長方形から欠けている部分を引けば求められる。 - 分けて移動させてもできる。 3 まとめる。  このような図形は、いくつかの四角形を作り、面積の公式を使うと求められる。 4 適用問題に取り組む。 △確認問題に取り組まひましょう。 5 振り返りをする。 △今日の振り返りを書きまひましょう。	※ これまでの学習を振り返りながら、このままでは公式を使って計算できないことを確認する。 - 線を引くなど区切り方を記入できるように、図形プリントを印刷し配付する。 - 自分の考えをもてない児童もいることを考慮し、隣の児童と相談してもよいことを確認する。 ※ 作業の早い児童には、いろいろな考えで取り組むように指示する。 ※ 面積を求めることができたなら、説明できるようにする。 - 説明する時は、「はじめに」「次に」「そして」「最後に」を使って順序立てて話すことができるように、それぞれの言葉を記入したカードを黒板に掲示する。 - 全体交流の場面では、実物投影機を使って説明できるようにする。 ◎ 長方形を組み合わせた複合図形の面積を既習の公式を使って考えることができたか。 ※ 適用問題は、本時で学習した形と似た図形を提示し、定着を図る。 ※ 振り返りには、「わかったこと」や「友達の考えを聞いて思ったこと」を書くようにする。

二つの効果を期待して、授業づくりの体験を行った。一つは、探究型学習の授業をより鮮明にイメージし、どのようにすれば児童生徒の探究を引き起こすことができるかを考えられるようになることである。もう一つは、校内において複数の教員で協働的に授業づくりをすることのよさを体験により感得し、各学校における探究型学習の授業実践を促すことである。

「県教育センターにおける研修」後の受講アンケートから読み取れたことは、「探究型学習の推進に向けてⅠ」で探究型学習の考え方や方向性について聞いたことを、

その次の「探究型学習の推進に向けてⅡ」で具体的な授業づくりに結びつけたことが、5年経験者の求めていたものと合致し、実際に実践してみたいという意欲につながっていたことである。探究型学習の推進に係る研修をより実行性のあるものとするためには、教員が実際に主体的・協働的に授業をつくる体験を行うことの重要性が浮き彫りとなった。

つまり、一人一人の教員が探究型学習を推進するためには、説明と演習は切り離すことができないということである。探究型学習の授業づくりの体験のみではハウツーの伝達にすぎず、授業自体が形式だけをなぞるものとなり、「確かな学力」や「生きる力」が児童生徒のものとならないであろうし、説明だけでは具体的な授業づくりへの不安が解消されないからである。

これらのことから、探究型学習を推進する際に基礎となる考え方に加えて、具体的な授業づくりに関する講座を行うことも求められていることがわかる。5年研における「探究型学習の推進に向けてⅠ・Ⅱ」は、探究型学習の授業場面のイメージをある程度持つことができ、県の重点施策を周知するために適した講座であったといえる。

2 出前サポートによる校内研修会のワークショップ

平成28年度の県教育センターの経営方針の一つに、出前サポートにより、学校や教員の自主的な研修・研究活動を積極的に支援し、職務と研修の一体化を推進することがある。出前サポートは、より多くの教員に研修の機会を提供して指導力の向上を図るため、各学校を会場とした出前研修である。各学校におけるOJTの充実を図るため、各学校の要請に応じ、校内研修や教育研究会等の活動の支援として指導主事を派遣している。探究型学習に関する出前サポートもその一環である。本項では、ワークショップを取り入れた校内研修会の例を示し、校内研修により探究型学習を進めていく契機とするための視点を提案する。

事例として紹介するのは、平成28年10月12日（水）に南陽市立沖郷小学校（以下、沖郷小）で実施した探究型学習に係る研修会である。この研修会に先駆けて、沖郷小の研究主任は探究型学習推進講座Ⅰ（第2章参照）を受講している。そのため、120分間の研修会で取り上げてほしいことは次の三つであった。

- 探究型学習と総合的な学習の時間の違い（探究型学習の概要について）。
- 探究型学習を仕組むにあたり、大切にしなければならない点や留意点。
- カリキュラム・マネジメントへの取り組み方。

この依頼を踏まえ、研修会は、次の流れのような2部構成とし、配付資料は、研究報告書（1年次）の第1章と次頁に示すレジュメであった。

【沖郷小での研修会の流れ】

前半	1 探究型学習とアクティブ・ラーニング（探究型学習の概要）	講義
	2 探究型学習の実践事例（教科、総合的な学習の時間）	事例紹介
	○ ワークショップ①「児童が探究していた場面を探そう。」	演習
後半	3 探究型学習で大切に考えていること	講義
	4 探究型学習で児童の「学び」をつなぐ…カリキュラム・マネジメント	講義
	○ ワークショップ②「沖郷小の実践の良いところをまとめよう。」	演習

なお、ワークショップの構想に際して、『実践ガイドブック2「ワークショップ型校内研修」で学校が変わる 学校を変える』（村川雅弘 教育開発研究所 2010）や『授業にいかす 教師がいきる ワークショップ型研修のすすめ』（村川雅弘 ぎょうせい 2005）を参考にしたので、詳しく知りたい場合は、そちらをお読みいただきたい。

平成 28 年 10 月 12 日
南陽市立沖郷小学校 校内研修会



探究型学習について

山形県教育センター

1 探究型学習とアクティブ・ラーニング

(1) 「確かな学力」(学校教育法 30 条 2)

前項の場合においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。

(2) 探究型学習

○ 探究型学習の定義(「平成 28 年度学校教育指導の重点」山形県教育委員会)

「課題の設定」「情報収集(文献・教材・資料の調査・フィールドワーク、実験、観察等の活動)」「整理・分析」「まとめ・表現」という一連の探究活動のプロセスに主体的に参加することを通して、知識・技能と学び方をバランスよく習得させながら、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等をはぐくんでいくことのできる多様な学習方法・形態の総称

探究活動のプロセスに児童生徒が主体的に参加

↓
「確かな学力」をバランスよく育成 → 「学び続ける人」の育成
■ 知識・技能の習得
■ 学び方を学ぶ
■ 思考力・判断力・表現力等の育成

(3) 国の動向(平成 28 年 8 月 19 日 教育課程部会 教育課程企画特別部会) 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ(案)」のポイント」より

- 「生きる力」を育むために
学校教育を通じてどのような資質・能力が身に付くのかを、以下の三つの柱に沿って明確化。
 - ① 生きて働く「知識・技能」の習得
 - ② 未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成
 - ③ 学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養
- 「アクティブ・ラーニング」の視点
学ぶ意味と自分の人生や社会の在り方を主体的に結びつけていく「主体的な学び」

3 探究型学習で大切に考えていること

(「探究型学習推進プロジェクト事業研究報告書(1 年次)」より)

(1) 単元や授業の構想

- ① 一人一人の学びを見つめ寄り添うこと
- ② 教える側の思考から学ぶ側の思考で授業を構想していくこと

(2) 授業の実践

- ① 児童生徒が授業の最後に達成感をもてること
- ② 教える側の思考から学ぶ側の思考で授業を構想していくこと
- ③ 児童生徒が、各教科・科目等を学ぶ楽しさやよさを実感できること

- 探究型学習 推進協力校において昨年度、実践された先生方の話から
 - ・日々の授業の質を高めていきたい。
 - ・取り組みやすい単元や学習内容から探究型学習をはじめよう。
 - ・新しい時間を探究型学習として設け、新たに組み込んでみよう。
 - ・総合的な学習の時間は探究型学習だから、総合的な学習の時間を大切にしよう。

4 探究型学習で児童の「学び」をつなぐ・・・カリキュラム・マネジメント

- 各教科等の学習を、学習内容と資質・能力の視点で関連付けたり、諸教育活動に共通する資質・能力を共有したりする
- 総合的な学習の時間の全体計画や年間指導計画を充実させる
- 児童にとって、学ぶ必要感のある単元計画をデザインする(児童生徒にとって魅力のある教材の開発と出会わせ方の工夫)
 - ・児童にとって、必要感のある課題の提示
→ 学習対象と児童生徒をつなぐ
 - ・児童が、深い思考になる学習活動の充実
→ 児童生徒の既習の知識や個々の考えをつなぐ
 - ・児童が、自分の言葉で行うまとめや、次につながる振り返りの実践
→ 学んだこと(ものの見方・考え方を含む)をつなぐ

○ 「主体的に学ぶ」を考える際に



おもしろそう！やってみよう



難しそうだけど、やってみよう

ポイント：いかに、「児童の目線(自然な思考)」で単元作りができるか
→ 教材研究(教科の本質理解・指導事項の理解)の充実が改めて必要となる。

多様な人との対話や先人の考え方(書物等)で考えを広げる「対話的な学び」
各教科等で習得した知識や考え方を活用した「見方・考え方」を働かせて、
学習対象と深く関わり、問題を発見・解決したり、自己の考えを形成し表したり、
思いを基に構想・創造したりする「深い学び」

学校における質の高い学びを実現し、子供たちが学習内容を深く理解し、
資質・能力を身に付け、生涯にわたってアクティブに学び続けるようにするため、
「学び」の本質として重要となる「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す
授業改善の視点

2 探究型学習の実践事例(教科、総合的な学習の時間)

- 探究型学習において、一人の児童に注目してみると・・・

河北町立谷地中部小学校 国語 第 2 学年(B 書くこと)
生活科の学習体験を教師が意図的に関連付けて単元を構想

単元名「かんさつ名人になろう(観察記録)」

- ◆ 「書き方」重視から「書きたいこと」重視(楽しんで書く)への学習
→ 最後まで学習意欲を持続する
→ 「書けそうだけど書けない」から学ぶ必要感が生まれる
→ まとめと振り返りに必要感が生まれ、指導事項も定着する
→ 児童の学びの様子を教師が見とり、教師の出方を変え、柔軟に対応

単元名「お話しのできしゃになろう(物語文)」

- ◆ 各目の「相手意識」を重視した学習
→ 最後まで学習意欲を持続する
→ 「英語に訳してみたい」という発展的な学びが生まれる

- 自分にとって意味のある学習を仕組むと・・・
酒田市立第三中学校 総合的な学習の時間 第 1 学年

単元名「SaCT II」

- ◆ 付けたい力の明確化
【自ら進んで課題を見つける力】【課題を探究する力】【共に学ぶ力】
- ◆ 地域の素材を用い、繰り返し働きかけ、深めていく
→ 学習意欲の高まり
→ 発表して人に伝える必要性が生まれ、他の生徒の発表を聞く必要性も生まれる
→ 教科で学習したことが、総合的な学習の時間の活動に活用

(1) 研修会の前半 ～ ワークショップ①を中心に ～

はじめに、5年研における「探究型学習の推進についてⅠ」を基本とした探究型学習の概要と、中央教育審議会初等中等教育分科会 教育課程部会 教育課程企画特別部会の「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（案）のポイント」（平成28年8月19日）を用いた国の動向について説明を行った。

次に、研究報告書（1年次）の第2章にある実践事例の中から「事例1 小学校 国語 第2学年 かんさつ名人になろう」及び「事例11 中学校 総合的な学習の時間 第1学年 いのちを育む 地域で学ぶ」を取り上げ、それらを基に児童生徒が具体的に探究している姿を紹介した。

その説明を踏まえて、沖郷小でも日常の授業の中に児童の探究する姿が見られていることを、参加した先生方自身が実感できるよう、ワークショップ①を行った。

ワークショップ①の具体的なねらいは、次の三つである。

- 沖郷小の教員が、これまで工夫しながら行ってきた授業の中で、沖郷小の児童の探究を引き出すことができていることを自覚し、自信を高めること。
- 探究型学習のスタートは、児童の学びの姿をよく見て取り、児童の思考を洞察し、その思考に寄り添うことであると確認すること。
- 探究型学習とはまったく新しいことを始めるのではなく、現行学習指導要領の中でこれまでも行ってきたことであり、それをより改善していくことであると確認すること。

このねらいを立てた理由は、探究型学習とはどのような授業をすればいいのかという具体的なイメージが湧かないという疑問を、推進協力校等の教員が探究型学習を行うスタート時点で抱いていたため、そして、同様の疑問が5年経験者のアンケートにもあったためである。

ワークショップ①のグループは、学年部ごととした。低学年部（第1学年、第2学年の担任団）、中学年部（第3学年、第4学年の担任団）、高学年部（第5学年、第6学年の担任団）、担外（教頭、教務主任、研究主任、担任外の教員、特別支援学級の担任団）の四つのグループで行った。ワークショップ①の流れを印刷し、参加者全員に配付した。次は、配付した資料の内容である。

ワークショップ①「児童が探究していた場面を探そう」（約25分）

（1）ワークショップ①のゴール

今年度前期の授業を振り返り、児童が探究していたのはどのような場面だったかを再確認する。

（2）ワークショップ①での約束

- なるべく多く書く。
- どんな小さなことでも構わないので、児童のよいところを見つける。
- 付箋を貼った先生の話は、うなずきながら、だまって、最後まで聞く。
- 他の先生の考えや気づきを否定しない。（建設的なアドバイスは歓迎）
- 同じような場面についての付箋を持っていたら、「私も同じで、～」に続けて、説明しながら付箋を隣に貼る。

（3）ワークショップ①の流れ

- ① 担当されている児童のうち3名程度をイメージし、教科や総合的な学習の時間において「探究しているなあ」と感じた場面を、なるべく多く思い出し、緑

色の付箋に書き出す。

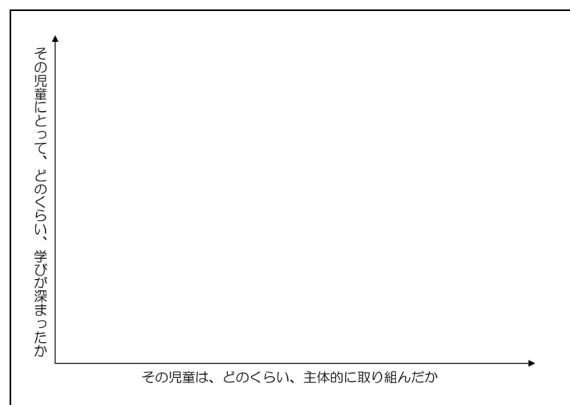
付箋1枚に書くのは1項目だけ。

② 学年部ごとにグループをつくり、具体的な児童の姿やそのときの手立てを説明しながら、配付した模造紙に付箋を貼っていく。

③ 情報交換

- ・ グループのうち一人は説明役となって、話を聞きにきた他の学年の先生に「探究していると感じた児童の姿とそのときの手立て」を説明する。
それ以外の先生は、興味のある学年の説明を聞きに行く。
- ・ 他の学年の説明を聞いた先生は、グループに戻ったら、説明役の先生に他の学年の話を伝える。

ワークショップ①でグループに配付した模造紙には、横軸、縦軸がかかれており、横軸は児童の主体性、縦軸は学びの深まりとした。次は、その模造紙を縮小したものである。



参加した先生方は、普段の授業や特別活動における児童が探究している姿をいくつも付箋に書き出し、「学級で新聞の切り抜きを読んでいるときにこんな姿が見られた」や「体育での鉄棒を一生懸命練習しているのも探究していると言えるのかな」などと言いながら模造紙に貼っていた。次の写真は、ワークショップ①の様子である。



ワークショップ①を通して、先生方は、児童が探究している場面は、教師が意図した場面以外でもよく見られることや児童が探究している姿は、児童の活動の様子をよく見て、探究しているかどうかを見つけようとしなければ見えてこないことに気付いたようであった。このような姿から、ワークショップ①のねらいは達成できたと考える。

ワークショップ①を進める中で、参加者の児童の探究に対する評価についてある傾向が見られた。それは、付箋を模造紙に説明しながら貼っていくときに、児童の主体性の度合いについて横軸のどこに位置するかは悩まず的確に判断し貼ることができたが、学びの深まりの度合いについてはどちらかと言うと縦軸の低い位置に貼ることが多かったということである。このような傾向を示す要因の一つとして、次のようなことが考えられる。知識・技能の獲得や向上は見えやすく、児童の関心・意欲の高まりを見て取ることも参加者にとっては普段から慣れていることであるのだろう。一方、思考力や判断力は、児童の内面にあり、児童の行動として直接的に見えにくい能力であるため、日常的に意識して児童の内面を見るトレーニングの必要があるのではないか。このような意味で、児童生徒の思考力や判断力を教師が見て取る能力を高めるための意識づけとして、本ワークショップは効果があったと考えられる。

(2) 研修会の後半 ～ ワークショップ②を中心に ～

後半の始めに、探究型学習で大切に考えていることについて説明を行った。説明に用いた資料は、研究報告書（１年次）の第１章を要約したものである。詳しくは、研究報告書（１年次）を参照されたい。その後、「探究型学習で児童の『学び』をつなぐ」ためのカリキュラム・マネジメントを取り上げた。そのときの説明の内容は次のとおりである。

探究型学習において児童の学びをつなぐために、カリキュラム・マネジメントは不可欠である。探究型学習を推進するためには、各学校において現在行っているカリキュラムを評価し、改善する必要がある、次のようなことが求められる。

- 各教科等の学習を、学習内容と資質・能力の視点で関連付けたり、諸教育活動に共通する資質・能力を共有したりすること。
- 総合の全体計画や年間指導計画を充実させること。
- 児童にとって、学ぶ必要感のある単元計画をデザインする（児童生徒にとって魅力のある教材の開発と出会わせ方の工夫）こと。

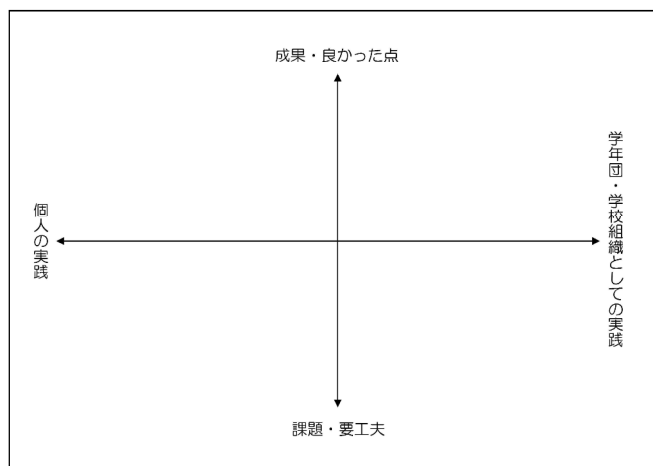
具体的には、児童にとって、必要感のある課題を提示し、学習対象と児童生徒をつないだり、児童が深い思考になるように学習活動を充実させ、児童生徒の既習の知識や個々の考えをつないだり、児童が、自分の言葉で行うまとめや次につながる振り返りを行うことで学んだこと（ものの見方・考え方を含む）をつないだりするように、授業を構想、実践することであろう。

この説明の後、ワークショップ②を行った。120 分間の研修会の後半ということもあり、参加者の負担を少なくするため、グループはワークショップ①と同じメンバーで短時間のワークショップとした。

事前打合せでは、各教員はカリキュラム・マネジメントの必要性を十分理解しているが、教員全員の取組みとして意識的に行ってきたという自覚はあまりないようだという話を聞いていた。そのため、ワークショップ②では、現在の取組みを評価・分析すること（PDCA サイクルにおける Check）から始めることとした。

そして、短時間で集中して取り組めるように、現在の取組みについて評価するための指標となる軸をあらかじめ設定した模造紙を、グループごとに活用することにした。模造紙の評価の軸として、縦軸を「成果（プラス面）」と「課題（マイナス面）」とし、横軸を「個人の実践」と「学年団・学校組織としての実践」とした。横軸の項目を「個人の実践」と「学年団・学校組織としての実践」としたのは、研修会後に振り返ったときにカリキュラム・マネジメントを再度意識し、教員一人一人のマネジメント・マインドが触発されるよう、意図したものである。

次は、ワークショップ②で用いた模造紙を縮小したものである。



ワークショップ①と同様に、ワークショップ②の流れを印刷し、配付した。次は、配付した資料の内容である。ただし、時間の都合で④～⑦を行うことはできなかった。

ワークショップ② 「沖郷小の実践の良いところをまとめよう。」（約 40 分）

（１）ワークショップ②のゴール

これから探究型学習を展開するために、現在の取組みを分析し、成果を確認する。

（２）ワークショップ②での約束

- どんな小さなことでも構わないので、なるべく多く書く。
- 付箋を貼った先生の話は、うなずきながら、だまって、最後まで聞く。
- 他の先生の考えや気付きを否定しない。
- 同じような場面についての付箋を持っていたら、「私も同じで、～」に続けて、説明しながら付箋を隣に貼る。

（３）ワークショップ②の流れ

- ① 学年部ごとのグループをつくる。
- ② ４月からこれまでの実践を振り返り、
青色の付箋……成果・良かった点
ピンク色の付箋…課題・要工夫・要精選
をなるべく多く書き出す。
- ③ 書き出した付箋を、配付した模造紙に貼っていく。
- ④ 同じような付箋をグループ化して、そこに小見出しをつける。
- ⑤ 関連がある付箋のグループを、線でつなぐ。
- ⑥ 学年部ごとに発表する。
- ⑦ 振り返り（シェアリング）を行う。

参加者は、各学年における授業や特別活動等に関して実践を振り返り青色やピンク

色の付箋に次々と記入し、意見交換しながら付箋を貼っていき、構造化していた。どのグループも年齢や教員歴に関係なく、和やかな雰囲気の中、意見を出し合っていた。高学年部の若手教員の一人が「工夫してきたことが成果として現れているんだな」とつぶやいたり、低学年部で同じ学年を組んでいる教員同士で「学校全体で取り組んでいることが成果になっているし、ここの課題をクリアすればもっとよくなるね」と話し合ったりしている姿が、模造紙を作成していく過程で見られた。

次は、中学年部のグループがワークショップ②で作成した模造紙を撮影したものである。



ワークショップ②を通して、沖郷小の教員は、教員どうしの対話により自分たちで自校のカリキュラムの強みと課題に気付くことができた。元来、カリキュラム・マネジメントは管理職や一部の教員のみがするものではなく、全ての教員が主体となり、それぞれの協働によって行うものであることから、ワークショップ②はその素地をつくるきっかけとして十分な内容を含んでいると考えられる。

(3) 研修会全体の評価（参加者によるアンケートより）

研修会終了後に、参加者にアンケートを実施した。アンケートの内容は、今回の研修会を4段階で評価するものと、感想や質問、疑問に思う点等についての自由記述（記入の有無は任意）の2項目である。

① 参加者による研修会の評価について

参加者による評価は、次のとおりであった。

評価	人数 (%)
大変よい	6 名 (31.6%)
よい	12 名 (63.2%)
あまりよくない	0 名
よくない	0 名
無記入	1 名 (5.3%)

参加者の回答は肯定的であった。無記入の教員も「先生方と一緒に学校の事を振り返ることができ、よかったです。実践例を教えていただいたので、探究型学習について具体的にイメージすることもできました。日々の授業のあり方を考える機会になりました。」と肯定的な記述しており、本研修会は参加者全員にとって有益なものであったと考える。

② 参加者の研修会に対する感想等について

研修会についての感想や疑問、質問として記載されていたことをいくつか紹介する。（原文のまま。下線部は、執筆者が引いたものである。）

- 「探究型学習」という言葉について構えてしまいがちでしたが、今日の研修を受けて、肩の力がぬけたように感じます。子供たちの探究が身近にたくさんあることを感じました。探究を仕組むことができるよう教材研究したいと思いました。
- 探究型学習というものを難しく考えていましたが、振り返ってみると、児童は常に「～したい」という思いを持っていることに気付きました。児童の思いを大切に、耳を傾けていきたいと思います。
- 講義だけでなく、ワークショップで話し合うことで、シェアリングすることができ良かったです。自分が課題だと感じていることは、他の先生方も同じように感じているとわかりました。
- 沖郷小同僚が沖郷チームになった気がしました。お互いを認め合える仲間にかこまれていることを実感させていただきました。子供たちに「探究しろ」という前に、先生自身がアクティブラーナーになるべきと強く思いました。
- ワークショップを通して自分たちの実践や子供たちの発想に探究的な授業や学びがあることを実感した。あらためて取り組むというよりは、日常の授業をどう高めていくかの大切さを学ぶことができた。ただ悩みとして、一人一人を高めていくことはかなり難しい感じもしたので、単元の時間配分なども考慮していく必要がある。
- 動機づけがまず大切で次にどのように問題を解いていくか、そして自分が何を学んだのか。この三つを大切にしていけることを改めて感じたところでした。

これらの感想から、校内で探究型学習を推進していくために必要なことが何かを沖郷小の教員の間で共通理解ができたことがうかがえる。講義、事例紹介、ワークショップの組合せの研修会を経験することで、参加者は自分のこととして、また実感が伴ったものとして探究型学習の授業づくりやカリキュラムづくりを意識するようになったと思われる。沖郷小の教員集団に、カリキュラム・マネジメントしながら探究型学習を進めていくという意識が芽生えたのではないだろうか。

③ 研修会の有効性について

以上のことから、沖郷小で実施した研修会は、教員にとって有意義で、効果があるものであったと考えられる。

探究型学習を通して、児童生徒に育みたい力は、「強い関心や意志を原動力に、知恵を駆使しながら、目の前の困難を乗り越える力」であり、それを育成するための授業には決まった型や方法論が明確にあるわけではない。とすれば、教員自身、または教員集団が、各学校の教育目標の達成に向け、まずは当面目指すゴールを設定し、実践しながらお互いに考え話し合い、PDCA サイクルを回しながら、次のゴー

ルを再設定していくしかない。

そのための授業づくりや研修は、各学校で管理職やミドルリーダーを中心に継続的に行い、カリキュラム・マネジメントがなされることが本来望ましい形である。しかし現実には、学校ごとに研修会のパッケージを独自に開発することは負担が大きい。とすれば、本章で提案したような研修会を参考に校内研修会を行ってみてはどうだろうか。県教育センターとしても、各学校の取組みについて、継続して支援を行っていききたい。

参考文献

- 1) 山形県教育センター 2010 『単元を構成する力を付け、授業力を高める 授業研究ハンドブック』
- 2) 村川雅弘編 2010 『実践ガイドブック2「ワークショップ型校内研修」で学校が変わる 学校を変える』教育開発研究所
- 3) 村川雅弘編著 2005 『授業にいかす 教師がいきる ワorkshop型研修のすすめ』ぎょうせい